第10節　山岳信仰遺跡としての宝満山（国内山岳信仰遺跡における位置付け）

1　山の規模と信仰

宝満山の信仰が、宝満山において、自生したものか、どこかの山の信仰がこの地に伝わったという契機によって始まったのかを考えたい。宝満山の信仰は、日本の山信仰のなかで理解できるものであると考えたい。宝満山の歴史を明らかにするうえで、全国の山の信仰と宝満山とを比較するのが重要な視角であると考える。まず、山の高さと、けわしさの観点から比較したい。

宝満山は現在は、宝満神社の下宮が、山麓部に位置し、山頂に上宮が祀られている。その両宮の比高は、679 mにも達している。下宮と上宮の平面距離を地図上で算出すると、約2 kmである。比高差と、平面距離とを三角形の二辺とすると、傾斜面の距離は約2.1 kmとなり、かつ傾斜角は、約19度弱となる。この傾斜角度は極めて小さく見えるが、19度は急傾斜の山である。

この数字を神の座す山として代表的な大和の三輪山（467 m）と比較すると、三輪山の傾斜角は、約12.3度となり、斜面長さは1792 mとなる。宝満山は、「けわしい」山であることが判る。独立峯で、同じように神の座す山と知られている近江の三上山（432 m）と比較してみる。三上山麓の三上神社の地は、標高約105 mであるので、比高は327 mである。斜面の長さは1052 m。傾斜は約18.6度。三上神社は、三上山を神山として祭祀しているが、現在は重要文化財の社殿に神が祀られてる。ところが、この社殿が修理された時に、本殿の背面に開閉することが出来る扉の装置があったことが確認された。つまり、本殿を建設したのちも、背面の扉を開け放って神山を祀っていたことが判った。さきの三輪山を祀る大神神社は神山（禁足地）と、拝殿（寛文4年、1664年）との間に三つ鳥居（現在の鳥居は1883年の造替・重文）を設置して、神山を拝している。宝満山は、傾斜や比高が示す数字が三上山と三上神社の関係にほぼ近い。

一般に登山では、比高150～200 mの登山では一時間の歩行が必要とされている。この数字は、日本国内の高山でも、それ以下の山でもほぼ同じである。若干の例を示しておくと次のようになる（すべて、登頂方向）。

・上高地・明神（1545 m）から槍ヶ岳山頂（3180 m）のコースタイム（比高1635 m）は、約8時間

・富士山の北口本宮富士浅間神社（850 m）から、山頂（3535 m）までのコースタイム（比高2685 m）は約10時間（なお、神社から馬返近くまでは、傾斜の緩い道である）。

・伊吹山（比高1377 m）は、4.5時間（ただし、山頂と、伊吹山寺との時間）。

・大峯山頂（1719 m）と洞川の清浄大橋は（比高約800 m）は2時間40分。

このように、山容の急峻さは無関係で、登山用の小径が明確である限り、その時の傾斜などは、さほど大きい差にはならず、すでに記したように比高200 mで約1時間強あるいは2時間弱である。（岩峯を登るなどの部分は、一般的でない）。

2　山の信仰の始まり

人類が日本列島に定住を始めて以来、ヒトは自然のなかで生活していた。ヒトは他の動物と同じように木の芽や樹葉、草、草樹根を食していた。草食動物は、ヒトと同じように木の実や樹葉、草樹根を食していた。ヒトは雑食動物であるので、他の肉食動物と同じように、草食動物、肉食動物、鳥類、は虫類や両生類を食していた。ヒトは雑食である。このため、他の草食や肉食動物に比して自然環境の劣化や悪化に対して、より強い適応性あるいは、順応性をもっていた。また、ヒト相互の意志伝達のための言語が発達したことによって、ヒト特有の“ココロ”が著しく発達し、過去の行動に対しての反省、そ

こから予言思考ひいては予言能力が発達していったと、言語学や発達心理学では説いている。

山岳といい、山という突土した地形に不思議な畏怖を感じたことによって、山への信仰が生じたと考えてよいと思う。山とヒトとの関係で見ると、つぎのように分類してみることとする。

① 生活空間に地理的に接した山。一般に黒山といわれることが多い。

② 生活空間とは、一定の距離が離れているが、その山体をよく望見することが出来る山。

③ 生活空間から望見することが出来ないが、位置的に山に接近することにより、あるいは高所（山や丘阜）に登高することによって望見できる山。

④ ②または、③に接続していて、大きな山脈あるいは山体となっている山の一部または全部。

⑤ きわめて遠方に存在する山。

⑥ 伝承、伝聞によって知りうる山で、今日の科学的観点からは、存在しない山であるが、ヒトはその存在を強く信じている山。

などに分類することが出来る。

3　飛鳥・奈良時代の首都周辺の山の信仰

7、8世紀、つまり飛鳥･奈良時代の首都の地である奈良盆地を中心として、祭祀あるいは信仰のあったの山を例示してみる。

① 生活空間に接した山

藤原宮を囲むように存在する大和三山（畝傍山、耳成山、天香具山）が、その代表である。平城宮からする春日山、御蓋山もそうである。

② 藤原宮から都の西の二上山と、東の三輪山はその代表で、ともに7～10 kmの距離にある。葛城山系も含めてよいかもしれない。

平城宮では、西の生駒山が代表である。はるか南東方向には、吉野大峯連峯が、冬季に望見できるので、含めてもよい。

③ 藤原宮からは、葛城山系の南側（現在の山名では金剛山から和泉葛城山）、信貴山、飛鳥盆地の東側の山（両槻宮の推定地）からは、二上山と信貴山の間を流れる大和川の地溝をはるかに越えて神戸市の北屏というべき六甲山系が、四季を通じてよく望見できる。平城宮では、宮の北の佐保丘陵に登ってみると、東北の比叡山、西北の愛宕山がよく望見することができ、笠置山系もよく望見することができる。

④ ②、③で記した生駒山から葛城山から葛城山系や吉野から熊野まで延々と続いている大峯山系などが、その例とすることが出来る。

⑤ 万葉集などにも詠われている富士山、筑波山などが代表である。筑紫の宝満山、越中の立山なども該当する。

⑥ 藤原宮・平城宮の僧侶、儒者、貴族ら知識階級に属していた者は、仏書における須弥山、儒における三山あるいは三仙といわれる海中にある蓬莱山、方丈山、瀛州山などは、よく知っていたであろう。後者は、『史記始皇帝紀』に記事があり、徐市をして、不老不死の薬を探させた故事があり、倭国との関係も極めて深い。神仙世界のことである。仏者の須弥山世界は、聖武天皇の発願による東大寺大仏の蓮弁に彫刻されていることによっても、天平時代においては知悉されていたことがわかる。須弥山は東大寺大仏鋳造以前から知られていた。法隆寺百済観音の竹幹を模した光背支柱の基部には山岳文と言われる須弥山彫刻がある。また、玉虫厨子の背面台座の板絵も須弥山であるなど、飛鳥時代から知られていた。

古事記と日本書紀に記されている日本の建国神話（伝承）の高天原も、この範疇に含めてよいものと

思う。つまり、人間（古代以前はヒトと表現しているが、古代以後は人間と表記する）は、一般的な理解として、理想の世界、救世主の領域を山に求めていたことを示している（ヒンズーやキリストの思想においても山は重要な要素を占めていることは、よく知られている）。これが、今日の神道につながっているとも言われているが、本稿では、神祇、神祇思考と表記しておく。

4　山と人間のかかわり

このように山と人間の関係を分類していくと、いくつかの小分類が出来る。それを記しておく。

分類	山と人間の位置関係	立ち入るか否か。	山での滞在時間	独立峯か、連峯か。
①	生活空間に即した山	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
②	生活空間とは一定の距離	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
③	生活空間から望見	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
④	山脈など	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
⑤	遠方の山	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯
⑥	伝承伝聞の形	A 立ち入り形 B 非立ち入り形	a 短時間 b 長時間	I 独立峯 II 連峯 III 連峯の突出峯

この表から、①Ｂａと記した場合は、生活空間に近く、山には立ち入らない。また山の接触時間は短いことを示している。この例は、奈良県三輪山、同春日大社の神体山である御蓋山などをあげることができる。日本の山の信仰で知られる著名な山を、これによって分類したのが、次の表である。

筑波山	②AaI	独立峯
富士山(現代)	③AaI	独立峯
富士山(古代)	③BI	
大峯山	③AaIII	連峯の突出した部分
大峯山奥駈道	③AaII	連峯
三上山	③AbI	連峯の突出した部分
比叡山(最終開山)	①AbIII	連峯の突出した部分
比叡山(以後)	②AbIII	
宝満山(律令以前)	③Aまたは③AaI	連峯の突出した部分
宝満山(律令以後)	③Aaまたは②AaI	
宝満山(修験)	③Abまたは④AbI	

となる。山の信仰は、仏教導入以前と以後とでは、大きく変わる。

人間が、山に立ち入らない山との関係と、人間が山そのものに分け入る関係とに小分類できる。分け入る場合は、さらなる分類ができる。山に分け入り、一定の行為をなした後、直ちに下山する場合。山にかなり長期に滞在して行為（修業や修法と言われることが多い。日本の神道（神祇）での用語は明確でない）をなす場合がある。また、分け入る山が独立峯あるいは独立峯的な山容の場合と、山脈あるいは山地状をなしている場合がある。これらを表示すると次にようになる。

5　山に位置する奥の院・奥宮

多くの山の遺跡（寺・神社）に、奥の院（奥社）が営まれることが多い。　奥の院、奥社の場合も、その成立つまり起源について、２つの実例がある。

第一は、福岡県宗像大社の奥ツ宮（沖ノ島）、中津宮（大島）、辺津宮（九州本土の神湊）の場合である。（注1）考古学資料からのみ判断すると、沖ノ島が祭祀の始発地であり、のちに九州本土から、沖ノ島を遙拝することになったとせざるを得ない。いっぽう奈良県三輪山・大神神社の場合は、現在の社殿付近つまり山麓に初期的な祭祀遺跡があり、のちに山頂直下の遺跡の形成をされたとしてよい。

いっぽう、飛鳥から奈良時代の平地伽藍の寺院においては、奥の院の形成はないのが一般的である。ところが、山の中に営なまれた寺では、当初から奥の院的な場所から始まる場合がある。その代表は、奈良県室生寺である。室生寺は、国宝五重塔、同金堂と堂内の諸仏で知られている。室生寺の平安時代の姿を伝える史料として、正和三（1314）年に写された『宀一山図』（金沢文庫蔵）が残されている。これには別に高野山円通寺本、東寺観智院本などがある。平安時代の康平８（1065）年に請雨法を修して験を得た東寺長者の成尊が作成したもので、室生川に沿った室生竜穴と竜穴神社を右端（南方向）として、室生寺の山林を含む全域を描写したものである。（注２）山の寺の全域を描いた図面としては屈指のものである。その左端地区に、国宝五重塔が描かれていて「五重木塔此塔内四仏」と注されている。そこから現在の奥の院への通路にあたる地点に、三重石塔一基と、七重石塔一基が描かれている。前者には「此塔六角石塔也」と注記されている。七重塔には「白石七重。塔下穴。上蓋。高七八尺許也。七重石塔下此中○○　。石畳底深○○也。」と注記されている（○印は梵字）。その下方には別の三重石塔を描き「如意峯此岩南草生夕リ。三重石塔。同堅恵大師手跡如法経心経」と注記している。このうち、国宝五重塔の左側山頂（岩峯）に立つ重要文化財層塔が、『宀一山図』の如意峯の三重石塔にあたる。

昭和21年に石塔の指定文化財調査に岸熊吉・末永雅雄両先生が行かれた時、石塔の前面の平板状の石を移動したところに、小形厨子に入った聖観音像が現れたので、本格調査を期して調査を中断され

図１　現在の室生寺の情況

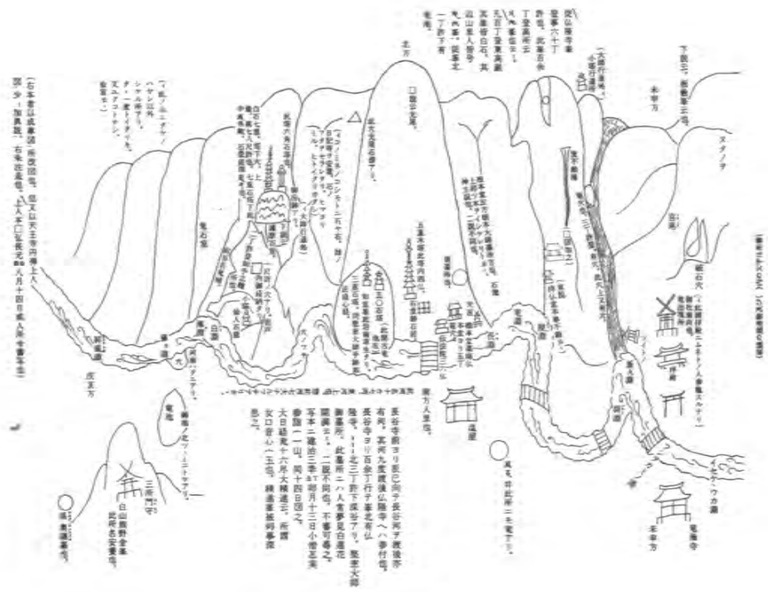

図２　六一山図

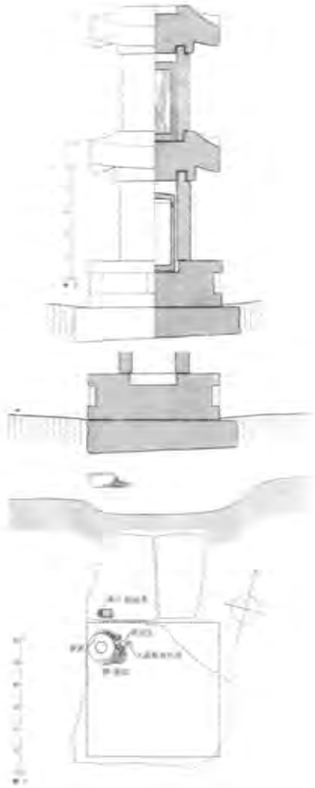

図３　如意塔の構造

図４　如意塔下から出土した和同開珎
（上２枚は銀）

た。のち、大岡実氏が塔を解体し、擬灰岩製の塔身内を掘り抜いてうがった空洞の初層と二層からおのおの一個の木製経筒を検土し、塔基の地下から蓋付銅埦、和同開珎、玉類などを発掘しているが、詳細な記録は残していない。出土品は、仏舎利様の珠１、瑠璃玉１、和同開珎（銅 189 枚、銀２枚）土器片少量である。ただ、報告図面第３図の注記によると、水晶製舎利容器、瑠璃玉なども出土していたようある。石塔の基石の底面から 10 mのところに、銅埦があり、銅埦の右半分を囲むように銭貨などが置かれていた。和同開珎のうち拓本が残る２枚は、いわゆる古和同で、銀銭２枚も古い字体である。（注 3）

和同銭は、銀２枚、銅 189 枚である。これらの出土品に混じって、塔基からか塔前面の平石下でかどうかは判然としないが北宋銭もあり、幾度も追加奉納があったことが知られる。和同開珎は、和銅８年以降も、長く鋳造された。このため、和同銅銭のみから埋銭の時期を確実にしえないが、189 枚もの大量の一括出土は、和同開珎の早い時期を示しているとしてよい。銀銭との出土状況の関係は、記録されていないが、銀銭２枚の併出は、きわめて和銅元年（708）の初鋳年に近いころの一括セットであるとしてよい。さらに付言するならば、出土和同銭のうち、出土地が確認される和同銀銭は、きわめて少ないことを勘案するし、和同銀銭の確実な最も新しい出土例である小治田安万侶墓（729 年）、銀銭 10 枚の一括出土を最下限として、如意峯に遺跡が形成されたとしてよい。（注 4）銅埦の形態は類例に乏しいが、図面を見る限りにおいて、遅くとも９世紀に下ることはない。総合的に見て、700 年代の前半なかでも、その前半に、最初の埋納があり、平安時代に至って擬灰岩製三層塔（現在は二層）が、その地点に建立された。ただし、塔基壇の中心点に合わせて埋納物が安置されていないのは、石塔建立前には、永久的な構築物がなかったことを示していよう。塔の周辺出土の遺物は、当初からの和同銭 13 枚、その他後世のものの存在は、一回の埋納でなかったことを示していよう。

室生寺は、興福寺僧修圓、堅恵とつづく寺塔建造などの寺観整備の前段階として、８世紀初頭つまり藤原京時代最末期から奈良時代初期にかけて、初期の山の信仰があったことを示している。それが、室生寺の始まりで、それを具体的に示すものとして、高い崖の上の岩峯の先峯部であることは、山の信仰の一形態であったことを示している。これに少し遅れて仏教が加わったと見てよい。修圓らの求法持法は、山の信仰の地を利用したのである。

やや長く記したが、室生寺如意峯の信仰は、仏教以前の山の信仰としてとらえることが出来る。もちろん、式内室生竜穴神社との先後関係も検討すべきであるが、直接的に検討する史料がない。ともかくも、室生寺の奥の院、正しくは現在の奥の院の下方に位置する如意峯の信仰が、のちに室生寺の建立に結びついたとしておきたい。

神社の奥宮についても例を挙げておきたい。栃木県日光二荒神社の奥祠は男体山山頂（2484 m）に位置している。男体山は、大きな日光連峯の一部であるが、宇都宮盆地からコニーデ型火山の山容がよく望める。まさに神奈備状の山である。また、山麓の中禅寺湖にも、美しい逆さ男体山が映し出されている。同山の開山については、弘法大師空海が撰文した『沙門勝道歴山水瑩玄珠碑並序』の碑文が『性霊集』に残されてる。この碑文によると、勝道は奈良時代の 767 年（神護景雲元年）と 781 年（延暦元年）に登山を試みたが失敗し、782（延暦２）年に再び登山し、登頂を果たしたという。男体山頂上には、二荒山神社の奥宮があり、中禅寺湖畔に中宮祠がある。中宮祠から山頂までは比高約 1190 m、登山の標準時間 3.5 時間である。八合目の滝尾神社付近からは、岩山となり、高木はなくなる。八合目近くからも縄文土器片、石鏃などが出土している。（注 5）

頂上は、火口壁の上にある。再噴火特に吹き飛ばされなかった火口壁の一部である。二荒山神社奥宮が鎮座しており、最高点は社殿から 300 m程の位置にある。そこには大きい三角形の影向石がある。岩峯の突出部である。ここから神が影向するという。山頂の右側（北側）に小さい社殿があり、太郎山神

社である。社殿の東側に岩裂（割れ目）がある。割れ目は上で幅5m程で、その深さは計測されていない。昭和38年に学術発掘調査が実施され、岩裂から多くの出土品があり、重要文化財に指定されている。古墳時代後期から平安時代に至る土器類、鏡などとともに、他の山の遺跡から出土していない奈良時代の銅印が多数出土している。また、これも他の山から出土していない時期確定が困難な鉄鐸が多く出土している。二光山頂遺跡の特色といってよい。その他に経軸端、銅銭など、山の遺跡で多く出土する遺跡も多い。昭和38年の発掘調査の記録によると、岩裂を約1m掘り下げると、土が氷結していて、お湯をかけたが、調査のさらなる進行は出来なかったと記されている。一種の永久凍土である。男体山の現在までに知られている出土品、伝世品を見ると、山頂の遺跡の形成が最も古く、山麓は、遅れたらしいという情況が知られる。山頂出土の遺物からは14世紀以降の山頂への奉賽は急減している。このころ山麓の神社が整備され始める。

男体山の信仰を示す遺跡に宇都宮盆地の集落跡があると、栃木県埋蔵文化センターの橋本澄夫元センター長は、いくつかの遺跡をあげている。栃木県鹿沼市北赤塚町の青龍渕遺跡（注6）からは男体山の山容がきわめて美しく望見できる。鹿沼市上殿町の竜地遺跡(注7)と宇都宮市下荒針町の金沢遺跡(注8)は男体山への捷径の道路上に位置し、かつ山容がよく望める遺跡である。今後、宇都宮盆地のこのような発掘調査が積み重ねられる課程で、勝道が男体山を望んで、登頂の宗教的意欲をかきたてられた遺跡が検出されるかもしれない（たとえば、当地に多い墨書土器などが出土すれば）。

たった二例をあげたに過ぎないが、山を対象とした遺跡が、山麓から頂上へと時間を追って遺跡形成されたのではないことを示した。山頂に遺跡形成されたのち、中腹あるいは山麓にも形成されるのである。この時は大規模化する。

図5　南東から判官塚古墳・日光連山を望む

6　修験道と山

全国各地に、霊山と言われる山は多い。ただし、その多くが出土品と伝承資料の分析からは、平安時代中期の末法思想の流行によるはるかな来世における弥勒による救済を求めての経塚経営以後にかかわる出土品と確実な史料が多い。平安時代初期までさかのぼる山は少ない。天台と真言両宗による弥勒信仰とは、異なる浄土教団による阿弥陀信仰は、釈迦入滅後、五十六億七千万年に出現し、衆生を導くという考えに比べて、よりきわめて近い将来に来迎される阿弥陀仏が人々に親しまれた。阿弥陀信仰を地上において現出させるために都塵を離れて、大都市近郊あるいは、近傍に阿弥陀寺院を造営することが流行した。岡山県東粟倉村の後山の修験は、寿伝では、14世紀に始まるという。日光の山麓の神社の盛行と同じ時期であることは注目されてよい。平安京における宇治、奥州平泉における毛越寺などが代表である。全国各地に例をあげることが出来る。

修験の本尊である不動明王信仰も深まった。藤原道長（966～1027）を例としてあげると、金峰山詣（寛弘4年・1007）を実行するとともに、比叡山にも3回にわたって徒歩で登山し、晩年の治安3（1023）年には高野山にも登山している。また平安京内にも法性寺などを経営し、宇治に浄妙寺を建立するなどもなしており、息男の藤原頼道の宇治平等院建立につながっていく。金峰山詣は頼道(長和3年(1014))、さらに師通（寛治2年・寛治4年）にも引きつがれていく。道長は、仏教のみならず神社にも詣でている（加茂、春日、岩清水など）。道長の仏寺と神社参詣をみると、その行動は、完全な宗教的規範性をもっていたとは考え難く、広く深く仏教と神、そして陰陽道に傾注していたのであった。具体的には宗教行事を行い、参詣している。倉本一宏氏によると『当時の貴族の中でも、やはり特筆すべきものであろう。』としている。（注9）しかし、随行を命じられ、自願して扈従した者が極めて多数に上る寛弘4年5月17日に金峯山詣の長斉を始めた日に、精進所に赴いたのは、中納言源俊賢以下17～18名にも及んでいて、その被官を入れると莫大な人数となる。その影響を過少視することは困難であると言えよう。

古代末以降の修験道において礼拝の中心となる不動明王は、空海が請来した仁王経五方諸尊図につづいて円仁請来、円珍請来像などを中心として流布していく。なかでも円珍は25歳の延喜2年（902）に黄不動を感得して以来、その宗教のなかで大きい比重を占める。円珍は入唐から帰朝後に圓城寺（三井寺）を開基したことで知られている。不動明王は、まさに尊号のとおり修験道にとっては、不動の信仰対象とされるに至った。

すでに、宮家準氏が『鎌倉時代によると、金峰山と熊野の間の大峯山系が修験の霊場として確立した』としている。（注10）この考えは、和歌森太郎が、『修験道史研究』（注11）で考えていた摂関期よりは、およそ100年程は新しい年代を示してる。和歌森氏は、「山伏(山臥)」の用語の初出を重視していた。いっぽう、宮家氏は「修験」の初出を『日本三代実録』の貞観10年（868）7月7日条としているにもかかわらず、修験の成立を少し新しいと見ている。私には、宗教史からの宮家氏の考え方を論じることは出来ないが、遺跡と出土品などの分布情況と解離していないことから、その指摘が正しいと思える。

7　人間と神のかかわり　―祝詞から―

神との関係では、神話によまれている山の神（たとえば伊吹山の神は『日本書紀（景行紀)』）では「近江五十葦山（伊吹山）有荒神」「主神化蛇之請、是大蛇必荒神之使也」などと、山の神の存在を示していて、山の神は大蛇に化身して出現するとしている。また使者として動物を使役している。また同じ景行紀などには「神山」とも表記されている。神話伝承ではなく、朝廷が山を祭祀した古い史料として『延喜式巻八』に集録されている祝詞がある。（注12）

祈年祭の祝詞に『山の口に座す皇神等の前に白さく・飛鳥・石村・忍坂・長谷・畝火・耳無と御名は白して、遠山・近山に生い立っている大木・小木を本末うち切りて・・・(中略)・・・・・、水分に座す皇神等の前に白さく、吉野・宇陀・都祁・葛木と御名は白して・・・(下略)』（岩波古典文学大系による）。また、六月晦大祓の祝詞には『国つ神は高山の末・短山の末に上りまして、高山のいえり、短山のいえりを撥き別けて聞しあさむ。(下略)』

祈年祭の祝詞の『山の口に座す皇神等』の所在地は、飛鳥山口神社などとして式内社となる。「水分に座す皇神等」の所在地は、同じく吉野水分神社などとなって式内社として奉祭されていることは、よく知られている。祝詞からは、一般に山には、民衆の祖霊神が山にいたとは、読めず、神話伝承以降のいわゆる人皇の霊もそこにいたとは読み取れない。神話伝承中の祖霊がいることになっている。この祈年祭と六月大晦の祝詞は、現在においても踏襲されていて、律令時代にあっては、国衙・郡衙において

も唱えられていた可能性はきわめて高い。逆に言うならば、必ず唱えられていたとみてよい。

いま、奈良県の各山口神社と水分神社の発掘調査はまったくされていないので考古学的に、おのおのの山口神社と水分神社の創始の時期を確定することが出来ないのを遺憾とせざるをえない。旧官幣社である丹生川上神社上社は、社地の水没移転に際して、発掘調査を実施した。吉野川左岸の社地は、遅くとも8世紀末から9世紀初頭には社殿があり、20世紀末まで、その位置が踏襲されていたことが明らかになっている。

ところが、さきに紹介した室生寺奥の院近くの如意峯塔下の出土品のうち、8世紀初期のものは、祝詞には記されてはいないが、式内室生竜穴神社と関係して見ることは許されるだろう。『宀一山図』に両者が描画されていて、同一の地点と認識されている。水分社と山口社の分布からみると、飛鳥・藤原の都宮に近い神社を指していて、平城京にかかわるものがないことは、その成立年代を決める手掛かりとなり、飛鳥（672～694）、藤原（694～710）とする武田祐吉氏らの考え方に従うべきであろう。律令の国衙・郡衙において、その土地の神あるいは地域に応じた祝詞があった可能性は強い（中臣の祝詞や出雲神賀詞の存在は、それを示唆している）。

8　律令祭祀と山を祀ること

律令祭祀という用語が、前世紀の後末期から言われるようになった。もともとは岡山県倉敷市の大飛島の発掘調査において、奈良三彩小壺の出土などから、各地域において国家祭祀に共通する出土品として、奈良三彩小壺（もちろん大形でもよい）、和同開珎などの銭貨、小形の鏡（海獣葡萄鏡や素文鏡）、銅鈴（これは平安時代以降のようである）などの全部または一部である遺跡がつぎつぎと発見された。律令祭祀の用語は、国家の場合、各国の場合、各郡の場合などがあり、他に有機質のものとしては、人形、木製品、絵馬などが構成要素とされている。土製品としては墨書人面土器などが含まれている（これは平地の遺跡でのみ出土する）。土馬も出土することがあるが、時代が下がると、三彩は灰釉陶や輪入陶磁器にかわることが多い。甲斐金峰山頂（2579 m）においても土馬が出土している。（注13）

銭貨の出土は、山の遺跡から始まったのではなく、近江崇福寺塔跡出土の無文銀銭（注14）、川原寺塔跡出土の無文銀銭（注15）などの仏教の舎利奉安具に伴う荘厳具が始まりである。ついで、藤原宮の大極殿院南門の西側から、須恵器平瓶に入れられた和同開珎などの地鎮具に含まれていた。この例は、大宰府正庁南門での地鎮具など、各地の衙署（官衙）に及んでいる。仏教では、法隆寺西院伽藍南門外における和同開珎を含む地鎮具となる。

平安時代になると官衙における地鎮法や祭祀の儀礼は大きく変わる。延喜式に集録されている各祭祀で、銭貨はまったく使用されていない。延喜式以前の資料は少ないが、奈良時代後半の書写本が重要文化財となっている。『内宮儀式帳』にも銭貨の記述はない。神祇祭祀と銭貨は切り離されたとみてよい。

いっぽう仏家では、平安時代後半から鎌倉時代に至っても経塚から北宋銭、南宋銭が出土し、大峯山頂に宇多上皇が親拝した時に築かれたと推定している護摩壇とその周辺からは、長年大宝・饒益神宝・寛平大宝・延喜通宝、乾元大宝などが多数出土している。仏教では地鎮などに際して五宝・七宝などを重視して用いている。銭貨はその法軌には含まれていないが、出土例は多い。これが民間信仰となり、厭勝銭（時には絵銭とも言われている。中国唐朝では、開元通宝の金銭さえ厭勝銭として製作された。）さえ多用された。和同開珎は、日本最初の銅銭であったので、その後も長く製作されたようで、近世の銅座においても縁起銭として製作されたとも言われている。

9　山の信仰と入山の形式

山の信仰において入山の期間（時間）の長短を、すでに問題とした。これは、鎌倉期以降に大いに盛行する修験との関係において最も大切な検討を要する項目である。

修験の総本山と自他ともに認めていた熊野と吉野の大峯山系における修行は、抖擻である。長期にわたって、大峯山中において修行するものである。

比叡山横川の首楞厳院沙門鎮源が著した『大日本国法華験記』は長久之年（1040～44）季秋に撰されたと記されている。その第11話には、「沙門義睿、巡行諸山、修行仏法。従熊野山入於大峰往金峰山・・・（中略）・・・視四方幽谷、十余日間」とあり、義睿なる僧が、10余日の日程で、熊野から金峰山へと抖擻したことが知られる。ともかくも長い日数をかけて山中をあるくのである。

宮内庁本『諸山縁起集』の第9項には「大峯の宿名百廿所」とあり、熊野宿から王熟宿（吉野川南岸）までに、120の宿があったとしている。この宿は、宿泊の場所ではなく、神が宿（やど）る場の数を示していることは、私が早くに考証したところである。この宿は、近世には、大峯七十五靡として再認識されるが、両者の多くは一致していない。（注16）

抖擻（登山用語では縦走）を中心とする修行は、歌人西行も12世紀の久安年間の頃に行っている。日数もかかる。また大峯と並び、著名な葛城修験も地図上の最短距離で約90 kmを縦走する。紀淡海峡の加太からさらには海上を友ケ島に至って、そこを起点とし、河内と大和の国境屋根を北上して、二上山あるいは信貴山に至る縦走である。

大峯と熊野間の縦走―科抖擻―の始まりについては、具体的に確実な年代を示す資料は乏しい。ただし、8世紀の土器片が、吉野川岸から大峯山頂をへて近畿最高峰の弥山の池と谷までの区間において、わずかではあるが出土しているので、8世紀には人が歩いていたことは確実である。弥山以南については知ることができない。

葛城については、われわれの研究は途中であり、明確にはしがたいが、金剛山（1125 m）弥山中腹に7世紀の山の寺である高宮廃寺（海抜550 m・史跡）があるなど、早くから仏教が、山の中に入った一例として知られている。礎石が整然として並んでいて、瓦葺の本格的な寺跡である。

大峯に戻ると、道長に始まる経塚経営は、大峯山頂を目指したもので、科擻ではない。中世末以降の大峯修験、なかでも江戸時代以降の大峯入峯の大部分は、山頂に登頂するものであって、科擻を目的とはしていない。

大峯・葛城の名称は、全国に仮託地名として、「大峯うつし」・「葛城うつし」の修業の場が全国に出現する。また、「胎内くぐり」「のぞき」「ありの戸わたし」などの名称も「大峯うつし」として全国各地の山に認められる。岡山県後山（1344.6 m）の縁起では、大峯山の行場と「うり二つ」であることさえ強調している（『作陽誌』）（注17）。

10　宝満山の出土遺物の検討

宝満山出土の遺物については多いように伝えられているが、小田富士雄氏が編集された『宝満山の地宝―宝満山の遺跡と遺物―』に収録されたものが基準資料となる。その出版から30年を経過しており、その後も下宮周辺を中心とした太宰府市による発掘調査が継続して続けられていて、多くの新しい出土品があり、多くの新しい知見が得られている。太宰府市の発掘調査は、原地区から内山地区にかけてであり、山頂地区、東院谷地区、西院谷地区については『宝満山の地宝』に頼らざるを得ない。

宝満山の山頂、つまり竈門神社上宮周辺の発掘と詳細な分布調査は、①法城窟、②上宮社殿（1957

年再建）の背面にあたる東側の巨岩の岩棚状のテラスが調査された。上宮祭祀遺跡と命名されている。別に、かもしか新道にちかい大南窟からの採集遺物がある。大南窟は宝満七窟の一つで、自然の巨大な岩がズリ落ち、重ねあっている岩の下辺の一種の岩陰洞窟がある。その広さは10 ㎡程である（海抜約530 m）。

この①法城窟には、現在は玉依姫像が安置されていて、水分神となっているという。土師器片（皿）多数と陶器片2個が出土している。

土師器は糸切り痕がある。たぶん、平安時代のものであろう。②の上宮祭祀遺跡は、山頂の絶壁を10 m余りも下った岩棚状のテラスにトレンチを入れて調査されている。このテラスでは、1961年の学術調査以前から、土器片が採集されていた。1961年の発掘調査では、このテラスに小規模な試掘溝を設けて、大量の土師器杯類、火、椀、皿、蓋などが若干出土し、須恵器の杯、椀、長頸壺、壺と、灰釉陶片が確認されている。

図6

土師器杯の口径部から内面にかけて油煙の付着したものがかなりあると報告されている。さらに底部穿孔の杯もある。ともに祭祀による使用を報告書は想定している。

須恵器の出土量は、土師器に比較して少ない。明らかに8世紀中頃としてよい。杯（厚報告では椀）。長頸壺は、口径部から、壺扇部にかけての破片であるが、全高20cm程の大型品で、明らかに金属製水瓶を模したもので、8～9世紀のものと思われる。

図7

灰釉陶は壺の一部が出土しており、九州産でない可能性が、原報告で指摘されている。

以上の土器類は、原報告図版5～6によると、土砂をはさまない土器層として発掘調査されていて、使用済みの土器なかでも土師器杯がおびただしく、厚さ50 m程の土器層を形成していた。これらの土器類は、山頂つまり現在の上宮社殿のあたりから投下されたものが、堆積層をなしたと考えられている。

発掘調査以外においても、上宮付近から大量の出土品があったことが、報告されている。山頂出土品には、滑石製有孔円板、三彩陶、皇朝十二銭、小形銅鏡、火打鎌、仏像片、懸仏片その他である。

滑石製有孔円板は、山頂部北側の崖下（稚児落と通称している）から採取されたもので、厚さ3 m、直径約3 ｃｍの円板で、径2㎜の孔が穿たれている。この一枚から年代を決めることは、困難であるが、全国的にみて、古墳時代に含まれる遺物である。目下のところ、宝満山における古い遺物であるとしてよい。

三釉陶としては、奈良三彩小壺の小斑片2点が、上宮社殿の南崖下約20 mの地点の緩傾地に堆積している土師器、須恵器の上面から採集されている。復元口径約3.7cmと復元されている。奈良時代三彩は、一般に奈良三彩といっている。福岡市鴻臚館跡と、大宰府跡などでは、唐三彩も出土している。宝満山出土の三彩小壺と同じような三彩小壺は、北は千葉県、群馬県から、九州の宗像神社沖ノ島祭祀遺跡まで、約60個出土している。高さ3.5～6.3cm、胴径5.0～7.8cm、口径3.2～4.3cm、胴径5.0～7.8cm、口径3.2～4.3cmまでと、ややバラツキがあるが、およそ統一した法量で制作されている。宝満山出土のものは小片2個で、沖ノ島1号祭祀遺跡出土三彩小壺をモデルとして復元されていて、各地からの出土品と規を合わせている。矛盾はない。畿内で焼成された三彩小壺である。

須恵器については、各地出土のものが一枚に図化されている（本誌第2章第3節第5項図2左上参照）。このうち、一番上に図化されているものは、杯蓋として図化されているが、わたしは破片の大きさを実見していないので、印象的観察であるが、上下を逆にして杯身とした方がよいのではと思う。杯蓋としたならば、この破片の頂部にはツマミをつけるためのナデ痕跡が見られるはずであり、図面からは古墳時代後期の杯身片とみたい滑石岩製の有孔円板につづく時期のものである。

銅銭は和同開珎（銅銭）から乾元大宝までが出土している。1983年までに採集された銅銭を集計した表によれば、皇朝十二銭のうち長年大宝から寛平大宝までの4種をのぞいて、ほかの8種が出土している。なかでも、神功開宝（796初鋳）と隆平永宝（818年初鋳）の多さがきわだっている。これほど多種類の皇朝十二銭が出土した山の遺跡は、史跡大峯山寺の本堂地下発掘調査をおいてない。隆平永宝から富寿神宝につづく承和昌宝（835初鋳）までの間は、宝満山の文献史料が空白にあたっている時期である。このことの解釈は、今後にゆだねざるをえない。

銅製儀鏡2面も、方鏡と円鏡があり、三重県の伊勢湾の孤島神島に鎮座する八代神社の伝世祭祀具（重文）とよく似ている。

以上の山頂（上宮）出土の考古遺物から考えられる宝満山信仰を箇条書きにすると以下のようにまとめられる。

1） 山頂と山麓の現出土品を一覧すると、山頂がもっとも古い。その根拠は有孔円板であり、古墳時代中期から後期にかけての時期を示す。

2） 奈良時代中期から後期にかけては、三彩小壺、銅銭、土器片などがある。

3） 平安時代初期の大量の土師器杯の出土。堆積層をなしており、その全量はうかがうべきもない。そのような平安時代初期の大量の土師器杯の出土は、奈良県の史跡大峯山頂の黒色土器の出土情況とよく似ている。この大量の土師器類の用途は、よく判明していないが、聖武天皇の天平16年12月に金鐘寺朱雀路での万灯会や、空海が天長10年に高野山で行いを始めて、現在に至っている万灯万華法要などとの関係も、検討する必要があるが、大規模な発掘調査をしなければ、確証を得ることは出来ない。

4） 山腹から山麓の遺跡に、1）～3）の情況に遅れており、天台宗と空海の九州での2年半にも及ぶ密行の時期以降のものとすることが出来よう。

5） 修験化は、もっとも遅れて始まったと認めてよい。

11　宝満山と、山の遺跡

かつて山を考古学資料から総体的に検討しようとする学問はなかったと言ってよい。大場磐雄先生の提唱された『神道考古学』の資料として、三輪山などからの出土品が、まったく考証することなく神道と関係する資料とされた。同じように仏教考古学では、おもに瓦葺の寺院建築のみを想い描いて、古瓦

出土地を寺跡としていた。近年の発掘調査で、そのいくつかは郡衙であることが判明した。

信仰を集めた山には、各時代の遺跡・遺物が重層的に累積している。

宝満山は、古墳時代には御笠川畔から望見する神奈備形の山容に対して信仰が始まり、山頂の巨石に対して信仰が始まったものと思われる。後世に水分神が祀られていることからの想像であるが、豊水を祈っていたのかもしれない。

大宰府都府楼を中心とする官衙が建設されてのち、ほぼ東北方向に見える宝満山のもともとの信仰に重ねるように律令祭祀の対象となった。一般には官衙近くの川辺や道路側溝などで多く行われた三彩小壺と皇朝十二銭を用いた祭祀が山頂で行われていることは、それ以前からの山頂祭祀の伝統が強かったことを如実に示している。山頂における三彩の出土は大峯山頂、栃木県男体山頂と宝満山頂のみである。大峯山頂と宝満山頂のものは奈良時代の三彩で、男体山のものは平安時代初期の猿投窯系のものである。このため奈良時代の確実な祭祀を示す山は、二山にのみとなる。この点も、宝満山が内包する歴史的意義の大きさを示している。

つづいて、大量の土師椀を用いた祭祀である。『宝満山の地宝』をよると、その多くに油の燃焼痕跡が付着していることが報告されている。神祗祭祀での火の使用は松明などであり、油の燃焼を伴う燃灯仏教色の強いものと言わざるを得ない。法隆寺の修正会である「おこない」では、金堂内に120灯もの灯火がもやされている。東大寺の修二会であるお水取りでは、二月堂内内陣に数百もの灯火が燃やされている。もちろんこの二例がいつから現行のような法要形態となったかについては、確実なところは判らないが、聖武天皇の万灯会や空海の万灯万華法がある。中国唐代の寺院で、釈迦が成道した日である12月8日を蝋八会として万灯を燃やして供養していたことなどを合わせると、宝満山頂においての燃灯供養はひろく、太宰府地域の各地点からも遠望できたかもしれず、宗教的にきわめて大きな意義をもっていたといえる。

10世紀から11世紀は、真言・天台がきそって山中に堂舎を建築した。そこでは僧自体が修行するとともに、時には、僧が民衆に向かって説教していたかもしれない。『日本霊異記』では、行基の説話として山房において説教する説話があり、燃灯用に獣油をも用いていたことを暗示する説話がある。宝満山の多くの中・山腹部の多くの堂舎においては、同様のことがあったかもしれない。経塚以降については、他の章において論及されているので、本章においては、ここまでとしておく。

宝満山の山頂を中心とする考古学資料が示す神祇祭祀と仏教法要においての祭祀と法要が残した豊富な遺物は、日本各地の山の信仰を残している山においても、特筆すべき、豊富な内容を含んでいるとしてよい。

ごく小規模の発掘調査が実現された以外には、地上に偶然現れた出土品の採集からのみでも、これだけのことが説明することが出来るのであり、多くの文物は、岩棚や、岩陰と多く残されていることを考えると、山頂はじめとする宝満山に国家的水準での保存、保護がされることを希望したい。

注

1　宗像神社復興期成会編『沖ノ島』『続沖ノ島』『宗像沖ノ島』を参照
2　岩波書店刊『大和古寺大鑑』の室生寺に写真および描きおこし図がある
3　岸熊吉・末永雅雄「宇陀郡室生村室生寺如意峯出土遺物」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報　第五輯』昭和30年
4　奈良県教育委員会『奈良県総合文化財調査報告書―都介野地区―』昭和27年

5　角川書店刊『日光男体山―山頂遺跡発掘調査報告書―』昭和38年
6　栃木県埋蔵文化財調査報告書第317集　青龍渕遺跡・皇宮前塚―経営体育成基盤・整備事業北赤塚2地区に伴う埋蔵文化財発掘調査
7　栃木県埋蔵文化財調査報告書第246集　竜地遺跡鹿沼警察学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
8　栃木県埋蔵文化財調査報告書第216集　山崎北・金沢・台耕上・関口遺跡東北縦貫自動車道弘前線（鹿沼―宇都宮間）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査
9　倉本一宏『全現代語訳藤原道長御堂関白記』（全3冊）の「おわりに」頁441。講談社学術文庫2009
10　宮家準『修験道―その伝播と定義―』の第一章第3節、頁26～27　法藏館2012年
11　和歌森太郎『修験道研究』平凡社東洋文庫　昭和43年
12　祝詞の訳文は武田祐吉「祝詞」岩波古典文学大系『古事記　祝詞』による。
13　信藤祐仁「甲斐金峯山」季刊考古学第63号　1998年
　櫛原功一「甲斐金峯山と金楼神社」『山岳信仰と考古学Ⅱ』同成社　2010年
14　奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告書』奈文研学報第9　1960年
15　菅谷文則「大峯山の奈良時代開山」『山岳信仰と考古学』同成社　2003年
16　正木輝雄『新訂作陽誌』第七巻　大正2年（昭和50年再刊）

挿図出典

図1　『大和古寺大観』第六巻　室生寺 岩波書店1976年
図2　『大和古寺大観』第六巻　室生寺 岩波書店1976年
図3　『奈良県総合文化財調査報告書－都介野地区－』 奈良県教育委員会1952年
図4　『奈良県総合文化財調査報告書－都介野地区－』 奈良県教育委員会1952年
図5　『栃木県埋蔵文化財調査報告書第317集青龍渕遺跡・皇宮前塚－経営体育成基盤・整備事業北赤塚2地区に伴う埋蔵文化財調査』 栃木県教育委員会2009年
図6　『山の神と山の仏』奈良県立考古研究所附属博物館　2007年　※菅谷撮影
図7　『山の神と山の仏』奈良県立考古研究所附属博物館　2007年